

手書きが思考力の基礎

文章は活字を指で打ち出すものに変わった。文字を書く、文章を書くには、過程がある。一つの文字の入りから仕舞いまで、文章の初めから終わりまでを頭が手に伝える。これが作文の過程である。これが考える力を育てる。打書きは、この過程の重要性を無視して、今や「書く」の本流になった。

難解語の壁にぶつ立ち向かう

荒田が読めなかつたり、長年間違て言っていた地名。栃木県の祖母井、千葉県の匝瑳市、酒々井町、大阪府の私市、広島県の己斐中、岐阜県の各務原市。うばが、そうさし、しすいまち、ささいち、こいなか、かかみはらし。

荒田は「哲学」を専攻した。哲学といえばカント、ヘーゲル、ライプニッツ、ニーチェ、ハイデッガーなどドイツ出身者が多く、哲学の学生はこうした哲学者の本を読む力を求められた。教授の研究室での授業は原書の独文和訳が主で、予め割当てられたページを学生が予習してきて発表する。毎週これが繰り返されるのを知って、荒田は初め三回出ただけで後は欠席。二度と授業に出なかった。

他の教授も自分が研究している哲学者の本を読ませる「語学」の授業になっており、英語も身につけていない者が第二外国語の授業を受けるのは苦痛でしかなかった。哲学は人間について考える学問だと思つて専攻したが、入口にドイツ語の壁が立ち上がり荒田の入場を拒んだ。

地名も人名も意思疎通に欠かさない重要な言葉である。ただし間違えても直せば意思は通じる。荒田は私市をわたくしと読み、駅の表示にささいちとあるのを見て無知を恥じた。地名人名を間違える恥は軽い。一瞬である。「あ、それでしたか」と頭を下げれば済む。話は前に進む。意思疎通の道具である言葉の中には、話しても書いても相手に通じないものもつとつた言葉がある。

経営管理講座 427 染谷和巳

の「易経」にある「形而上」からとつた言葉のようだが、荒田は解らないまま死ぬだろう。演繹(えんえき)、帰納(きのう)、弁証(べんしやう)、実存(じつぞん)、表象(ひやうしやう)、観想(かんそう)、唯物(ゆいぶつ)、理論知(りろんち)。哲学用語専門の辞典があり、それで意味を調べてみる。病名など医学の専門用語やカタカナのデジタル関連の用語が解説を読んでも手あがないと同様、荒田には「おそくない」「無理だ」と言うのと偉そうに教えているが、無理に尻を叩いて挑戦すれば、少しおかしい頭がさらにおかしくなる。「変人」から「狂人」に格上げされる。それで哲学と縁を切った。

荒田は哲学科卒である。こんな不良学生によく卒業証書を出してくれたものである。哲学科はヘンなのが多かった。同期生十八人のうち十四人は四年で卒業して全員高校教師になった。

日本人は昔は筆で字を書いた。今は鉛筆やペンで書く。目と指に神経を集中する。これによって脳が活性化し、思考力が伸びる。アイウィルはビジネス研修と管理者研修のレポートは全て手書きを強要している。考える力を伸ばすために「たくさん書く」経験が欠かれないからである。

書くから打つに変わった弊害

経営者研修は読書論文は手書きを求めるが他のレポートはワープロ打ちでよしとしている。これまで十分書いていて脳が成長して思考力も伸びたので、これ以上負荷をかけなくてもいいと判断してこうしている。提出課題が膨大で時間とエネルギーを節約せざるを得ないためもある。

二十六期卒業の宮木美絵子(現在結婚して花里姓、カナエ産業(株)社長)はワープロを一切使わず、全課題を手書きで提出した。「手書きでない」と自分が出てこない。だから手書きにこだわるんです」と言っていた。花里社長は今も手紙やオーナーへの報告書を手書きで通している。敬服する。

子供の頃から読み書きを行い、大人になるまで十分な思考力を身につけた人が、ワープロやスマホのメールやSNSに変わるのはい。頭に言葉が詰まっております自分で文章を書く「基礎」ができていないからである。子供の頃からワープロで文字を打つばかりで、ほとんど自筆で書くことなく育った人はどうか。ワープロは正確でスピードがある。しかしワープロの文字文章には欠陥がある。手書きは一つの文字を書くには頭から「つぎはどう書く」という指示が出てくる。手書きの指示に従って表現する。文章も「つぎの言葉そのつぎの文字」を頭に思い浮かべて書き出す。ワープロはこの頭の働きをムダな作業としてカットした。指先を触れば印刷活字がポンと出る。

かつてほとんどの子がそろばん塾と習字教室に通った。荒田もそのひとりである。どんなに貧乏でも親は月謝を払って通わせた。そうしなければ向こう三軒両隣から白い目で見られる。日本人の仲間に入れてもらえなくなる。親はこう感じて見栄を張った。おかげで日本の子供は数字に強くなり、難しい日本語を自在に書けるようになった。考える力の基礎を子供時代に身につけられた。今の子は学習塾に通い、そろばんと習字の塾には行かない。小学校でそろばんと習字を、教

てくる。文章をほとんど書いたことがない人は頭の中の言葉が少ない。出てきた字が自分が求める字かどうかの判断ができない。文章でもつぎの言葉が思い浮かばない。文章を指で打つ習慣を身につけた人は、広く深く考える力がない。小中学校で作文授業を受けず、タブレットを打つだけで育った人は、ナリは一人前でも頭の中は空洞に近い。手書きはムダな作業ではなく、考える力を伸ばす最も重要な作業である。ワープロは考える力のない人を作る。これが欠陥である。手書きを十分やって大人になってからワープロを使う方がいいが、未熟な子供が「打書き」に慣れてそのまま大人になると、善悪正邪の判断ができない思考力不足の危険な人になる。

習字算盤を捨てるデジタルへ

こうした人が増えている。本も新聞も読まず一日スマホの画面を見ている人、頭の中がからっぽなので「こわい」「おもしろい」「うまい」「楽しい」といった単純な感情に強く反応し、こうした声に迎合して流される人、非常識不人情を平然と行う人が増えている。える。よう文科省が指導しているが、大半の学校がやっている形だけ作って熱心な指導をしていない。国語の原点は習字である。漢字を一画一画でいかに描くところは、は払い、撥ねるところはきちんと撥ねて書く。漢字の手書きの繰り返し、撥ねる、返しが、言葉を増やし、子の脳を活性化し考える頭を作っていく。ゆとり教育が間違っていたと白旗をあげた後、後に小学校の英語授業を始め、つぎにデジタル授業に力を入れよと指示を出した。文科省の「国語教育軽視」は度を越している。